

007 × madame FIGARO japon

『ロシアより愛をこめて』トークショー付き上映

トークゲストは英国の文化や 007 シリーズに明るい研究者、作家の中野香織氏。『ロシアより愛をこめて』4Kレストア版上映前のトークとして、007 のデザイン、スタイル、衣装、音楽などシリーズの要素を熱く語られました。

聞き手は雑誌 FIGARO 編集者で、ご自身も 007 ラヴァーである金井洋介氏。

盛況に終わったトークショーのダイジェストをご紹介します！



◇金井洋介氏（以下 金井：敬称略）：

007 シリーズは“ラグジュアリー”がテーマのひとつになると思うのですが、中野さんは“ラグジュアリー”という観点から見ると、ジェームズ・ボンドをどう思われますか？

◆中野香織氏（以下 中野：敬称略）：

“ラグジュアリー”という言葉は、例えばマーケティング用語で使うときには「高品質」「高価格」「高ステータス」というカテゴリーを意味しますが、その意味ではボンド映画はラグジュアリーなモノやサービスにあふれる世界を体現していますね。また、人文学的に言うと、“ラグジュアリー”の語源には3つの意味があります。そのうちのひとつが、「ラスト(Lust)-色欲」という意味です。だから、シェイクスピアが“ラグジュアリー”と書く時、それは情事の話だったんです。2つ目として「植物が生い茂る」という意味があります。そして「ルクス(Lux/lx)-光の単位」が語に含まれます。つまり、“ラグジュアリー”を人文学的に言うと、セクシーで、豊かで、人や社会を光り輝かせるもの。これが“ラグジュアリー”の原初的なイメージですね。ボンドはマーケティング的な意味でも、人文学的な意味でも、“ラグジュアリー”な存在だと思います。

◇金井：

なるほど。“ラグジュアリー”という言葉からくる「高品質」「高価格」といったイメージが、映画の中にアイテムとしてどんどん出てきますね。『ロシアより愛をこめて』では、あのアタッシュケースやボスボラス海峡の風景、豪華な列車の旅、そういった観点で観る面白さもあります。

◆中野：

そうですね。例えばオリバー・ゴールドスミスのサングラスのような、“ザ・ベスト・オブ・ブリティッシュ=イギリスの最高峰”が007シリーズにはたくさん出てくるんです。その結果として、それがイギリスの文化的な威信を押し上げて、イギリスそのもののPRに貢献しています。例えば2012年のロンドン五輪の時に、ジェーム

ズ・ボンドに扮したダニエル・クレイグがエリザベス女王をエスコートしました。それはやはり 007 シリーズが“ザ・ベスト・オブ・ブリティッシュ”を作品の中でたくさん紹介してきた実績が、結果として映画を超えて、女王をエスコートするに値するイギリス文化の象徴とみなされることにつながったからですね。あの演出はイギリスという国の絶大な PR になりました。

◇金井：

次の 007 最新作ではどういった“ラグジュアリー”さが出てくるのか、楽しみです。

今日もたくさんのファンの方がいらしていますが、60 年の時を超えてなお、なぜこんなにも 007 に魅了されてしまうのか、多くのファンを惹きつけてやまないのか、それはどうしてだと思いますか？

◆中野：

たくさん理由があると思うんですが、ひとつはやはり偉大なるマンネリズムでしょうか。あの不変のテーマ曲や、M や Q などの登場人物、美しいロケーションなど、お約束のモチーフが出てくると「待てました！」という感じで嬉しくなってしまう。で、時々それがちょこっと裏切られるという楽しさ。その世界観にはまってしまうと、次はどういうお約束事を見せてくれるのかなという期待も出てくる。そんなマンネリズムの力というのも理由のひとつだと思います。

◇金井：

ある種、歌舞伎みたいな世界観ですね。「六代目ボンド」というと、なんかほんとに屋号みたいな、そんなニュアンスも感じられます。

◆中野：

そうですね。それぞれの主演俳優が、完璧に原作のコピーではなく、その人の個性を生かしながらちゃんとそれぞれのボンド像を創りあげているということも、やはりボンドというキャラクターの魅力が不死身である理由じゃないでしょうか。

◇金井：

では、これからご覧になっていただく『ロシアより愛をこめて』について、中野さんの思い出やお勧めの見どころをお聞かせください。

◆中野：

主題歌はそれこそずっと小さい時から聞いていた音楽で、頭の中にメロディがこだましてる感じなんですけども。やっぱり 60 年代のいいところが表現されている映画でもあるかなと思います。タチアナが着る衣装のコンビネーションが美しいんですよ。まさかこの色の組み合わせを 60 年代でやっていたのかというような、洗練された色やアイテムの組み合わせを、タチアナの衣装でぜひ確認していただきたいです。本当に優雅です。あとボンドとタチアナのセリフもエロティックで、最低限の言葉でものすごく奥行きのある想像をさせるという、

その意味では非常に知的でセクシーな映画ですよ。

◇金井：

僕はこの映画で注目していただきたいのは、この作品にだけ映っているシャンパーニュがあって、それがテタンジェ・コント・ド・シャンパーニュ（TAITTINGER COMTES DE CHAMPAGNE）なんです。原作のポンドはよくテタンジェを飲んでいるんですけど、イアン・フレミングはそれを「僕はこのブランドが世界で1番いいと思っている」と書いてるんですよ。原作小説『女王陛下の007』でポンドがヴェスパー・リンドのお墓参りに行った後に部屋で飲むのも、テタンジェだったんです。

これは実際にテタンジェの輸出部長のインタビューで聞いた話なんですけど、貴賓室にはイアン・フレミングからの手紙が残っているそうなんです。テタンジェは映画にシャンパーニュを出してくれたということで、テタンジェ・コント・ド・シャンパーニュを1ケース、イアン・フレミングに贈ったそうなんです。そしたら、イアン・フレミングが「テタンジェをありがとう。本当はポンドと飲もうと思ったんだけど、あいつは今、日本に行って日本酒を楽しんでるから、これは私1人で飲みます」という風に書いて送ったそうなんです。そういったところからも、実はテタンジェのシャンパーニュっていうのが、意外と面白いお話になってくるかなと思うんです。

◆中野：

そういう一つ一つの小道具、セリフ、ファッションからいろんなことを学べるのがポンド映画の面白さですね。

◇金井：

本当になんかオタク心をくすぐられます。

◆中野：

そうですね。1回オタク心をくすぐられると、果てしなく学びたくなってくるという、しかもシリーズ全作で学び甲斐のあるボリュームがあるっていうところが、ポンド映画の強みでもありますね。

◇金井：

madame FIGARO.jpの方に書かせていただいたんですけども、今回公開される10作品のレビューとともに、こぼれ話みたいなものも書いているので、ぜひそちらもご覧いただけたらと思います。

なかなか話は尽きないんですけども、ぜひこの後『ロシアより愛をこめて』を楽しんでご覧いただけたらと思います。中野さん、今日は本当にありがとうございました。

◆中野：

こちらこそありがとうございました。

◆2023年9月28日（木）19:00

◆新宿ピカデリー シアター3

◆テキスト構成：@007_4K_JP / TC エンタテインメント / スタジオ・ピリカ

